

## 「すすめたい書物」再考

中山 文（教育推進センター）



### 『私の個人主義』

夏目漱石著 講談社 1978

普段とは違う春を迎えた。桜の開花を受けて、やわらかな日差しの中で草花が芽吹くのを愉しむ気持ちと、新年度に向かう不安な気持ちが入り混じる不安定な季節であるが、今年はさらに様子が異なる。

「入学時に配布される「学生便覧」の教員紹介ページには「学生にすすめたい書物」欄があるが、なかなか興味深い。」私が「読書ガイド」を書くのはこれで3度目となるが、2年前の「ガイド」はこのような書き出しで始めた。各ページに含まれる「メッセージ」や「趣味」よりも先生方の人となりが見えたとひそかに思ってきたが、私はそこにおいて『白洲正子“ほんもの”の生活』（新潮社、2001）を紹介してきた。そろそろ別のものを紹介しようかと考えていたものに、夏目漱石の『私の個人主義』（講談社、1978）がある。

『吾輩は猫である』『坊ちゃん』『こころ』。漱石の作品名は容易に数冊はあげられるものの、ふりかえると、この3冊のうち私がまともに読んだといえるものは、学生の頃に読んだ『こころ』であろうか。そして『私の個人主義』は、私自身、研究対象をイギリス文学に決めた頃に読んだものである。

これは、漱石がある学校に呼ばれ、学生を前に行った講演録である。この世に生まれた以上何かしなければならぬ、しかし何をしてよいか見当もつかない。漱石は陰鬱な日々を送りながらも大学を卒業し、教師の職に就いたという。漱石は学生たちに語りかける。「私は始めて文学とはどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作上げるより外に、私を救う途はないのだと悟ったのです。今までは全く他人本位で、根のない萍<sup>うきぐさ</sup>のように、そこいらをでたらめに漂よっていたから、駄目であったという事によく気が付いたのです。」（本文引用）苦悩の末ようやく見出せたのは、他人本位ではなく自己本位という姿勢であると語る。講演の約十数年前に漱石はイギリス留学をしているが、異国での経験も大きく影響しているであろう。漱石がこの講演で説く「自己本位」とは何か、欧米と日本、異なる社会における「個人主義」の誕生、そしてその変遷について考えさせられる一冊であった。

上掲の『白洲正子』に関連して『民藝 一特集 柳宗悦の「直観」一』（日本民藝協会、2019）にふれておきたい。当代一の目利きと評される白洲は、自分が目利きかどうかなど関係ない、ただ自分が好きなものだけわかる、という。「どうしたら美しさが分るか」との質問に対する柳の言葉もまた深い。「知識で分ったとて、実は分ったことにならぬのが美の性質なのであります。知識で分る美があったら、寧ろそんなものは真の美でないと考えの方が至当なのであります。」（本文引用）

この数カ月間、さまざまな状況の中、自ら判断し行動することが求められている。一つの行動が自らに、それとともにまわりに対しどのような影響をもたらすか考えるのは「想像」の力である。また、「目に見えないもの」「言葉では表現し難いもの」に向き合うのも同じ力である。自己本位となれば自己責任もともなう自らの言動に、改めてじっくり向き合う時である。